「対話と学習」に関する研究方法の考察 ～包括的理論枠組と対話過程の分析～
杉本 明子

教授・学習研究においては伝統的に実験室的状況における個人の知識や認知過程に焦点が当てられてきたが、近年、社会的相互作用における認知活動が注目されるようになり、二者間の対話場面、教室における教師・生徒間の相互作用から共同体でのコミュニケーション活動に至るまで、様々な場面・領域において、社会的相互作用が学習・認知発達を促進・支援することが指摘されてきた。

しかしながら、同時に、学習課題の構造や学習者の年齢などの諸条件による社会的相互作用の学習への効果が異なっていることが様々な実証的研究によって示され、特に、有効な対話スタイルに関しては多くの研究が矛盾した結果を提示してきている。このように矛盾した結果が示されてきた原因として、次の2が考えられる。

第1は、従来の研究が異なる対話スタイルを包括する研究枠組を考慮することなく、各々の理論的枠組においてのみ対話対話スタイルの優位性を主張してきたという点である。包括的枠組みによって異なる対話スタイルを比較・検討すれば、異なる対話スタイルが異なる学習効果をもたらす可能性について考察できると考えられる。本発表においては、教授・学習研究において大きな影響力を及ぼしてきたピアジェ理論、ウィジェシキー理論の流れをくむ研究に感情的な対話スタイルと、近年注目されてあるフェミニスト認識論に基づいた対話スタイルに焦点を当て、対話者の認知的関係性、対話の目的性、学習のメカニズムなどの観点を含む枠組みからこれらの対話スタイルを分析し、異なる対話スタイルと学習の関係性について検討する。

矛盾した結果が生み出された次第の原因として、「対話と学習」に関する従来の研究では、相互作用過程の分析が不十分であった、或いは、相互作用過程と学習過程の関係性を検討するための客観的な方法を生み出すのが困難であったということが考えられる。言語学においては会話・談話分析のために様々な方法が用いられてきたが、それらの分析方法にみられる発話の単位・機能・連鎖・意図の取り扱い方、分析の視点、理論化の志向性、意味解釈の仕方などの観点から、従来の心理学研究における相互作用過程の分析を見直してみることにより、心理学研究における対話分析の特徴を考察するとともに今後の課題について検討したい。

心理学における仮説の検証と生成
岡田 猛

各学間分野の研究者の間では、それぞれの分野に特有の「ものの見方・考え方」が共有されており、そのような「ものの見方・考え方」が、研究活動を行う際の暗黙の認知的制約となっている。心理学者自身が自らの認知的制約に気づかず、その制約を越えて、柔軟な研究活動を進めていくための一ステップであると思われる。本研究では、多くの心理学者が持っている研究方法に関する「思い込み」あるいは「ものの見方・考え方」、これを研究する際には、明確な仮説を立ててから、データを収集し、仮説を検証すべきであるという仮説検証型の研究方法についての考察を取上げる。本発表では、1）そのような「ものの見方・考え方」が、心理学のコミュニティの中でどのように形成され、どのように変遷してきたのだろうか？2）そのような「ものの見方・考え方」は、研究活動においてどのような役割を果たしているのか？という問いへの答えを探しつつある。さらには、もし可能であれば、3）どのようにすれば新しい仮説を生成し、創造的な研究を行うことが可能になるのかという問いについても考察したい。

上述の問いに答えるために、本研究では、1）学会論文の書き方、2）研究の進め方、3）心理学の教育の3つの側面について、自然科学の論文の分析や心理学の関係の論文の歴史的分析、心理学の学会論文の執筆者を対象にした質問紙調査、心理学の研究の現場でのフィールドスタディ、心理学の教育現場における実験等、多様な方法を総合的に採用した。

今回の発表の主張は、昨年の日本心理学会の小講演での私の発表と基本的には同じものであるが、前回の発表の日本の心理学に関するデータを土台にして、さらにアメリカの心理学や自然科学の論文分析、および、日本心理学の教育や研究の現場での実験データやフィールドデータについても報告したい（本発表は下木戸隆司氏との共同研究に基づいている）。